



地域支援だよりは「愛着障害」を話題にしています。本号では、「愛着」に関連する興味深い記述があったので紹介します。

生まれた子どもをなめないゴリラと人間



多くの動物の子育ての研究は、出生直後の子なめ行動が免疫機能をはじめとする生体の生命維持活動を高めることを報告しています。モンタギューによると、大型霊長類で生まれたばかりの子どもをなめない親はゴリラと人間だけだそうです。そして、人間の初産で平均14時間という長い分娩時間中に受ける多量の触圧刺激をこの子なめに相当するのではないかと類推しています。～ 中略 ～

人間は誕生の瞬間だけではなく、その後の発達においても成人とは比べようもないほど、多くの触圧刺激を受けます。子宮内で多くの保護のもとにいた胎児がその保護を突然解かれるならば、生後もそれに変わりうる保護が必要だからです。乳幼児の自我や情緒の発達の研究家たちは、こぞってそれに相応するものを養育者との肌の接触を通じた情緒的交流であるとしています。身体境界に子宮環境を想起させる心地よい刺激を感じることは、子ども自身に安心感をもたらし、この安心感が自・他を同時に感じさせ、自我を育てるとともに、人に向かう愛着を育てるといいます。



ワロンは、乳幼児の「泣く」ことの中に、人間が困難を克服していく過程の原型を見えています。つまり泣くことは慰められることを求め、人間は情緒的な交流のもとではじめて痛さを克服できるということです。彼の考えに立てば、情緒的交流の充足に触覚が主要な役割を果たしていることとなります。発達においての情緒の交流の意味を考えると、乳児期に親に抱かれることは、移動能力の欠如の代償以上に積極的な意味を持つこととなります。愛情の遮断や内面の不安が皮膚のかゆさとなって現れるという指摘も情緒と皮膚感覚の密接な関係を逆説的に示している点で興味深い指摘です。

引用 「新・感覚統合法の理論と実践」(学研 坂本龍生・花熊暁 1997)

ちなみに、私の長男の出産は、頭が大きかったせいもあり、24時間以上かかる難産でした。

一方、長女は前置胎盤ということで帝王切開での出産でした。

その後、長男は幼稚園の頃には一人で寝付くことができるようになった反面、長女は小学4年から5年の頃まで一人で床につくことができない子どもになりました。

ひょっとすると、それは、分娩時間中に体験しなかった触圧刺激の不足分を補うための行動だったのかもしれませんが。と勝手に想像してしまいました。

亡父の闘病中、モルヒネでも効かない痛みの中で、^{むく}浮腫んだふくらはぎに手を当てるだけで、気持ちが良くなると言っていたことを思い出します。

コロナ禍の影響だとか、発達段階(生活年齢)だとか、いろいろ考慮しなければなりませんが、個人的には、可能な限り子どもの体を触ってほしいと思っています。そうすることで、筋肉の状態(左右差、硬い柔らかい、体温など)も触覚を通して理解できることもあると考えます。